

俳句雑誌



空

令和5年8月20日発行

第21巻1号

通巻第107号



2023.8・9

SORA 107号

粕屋 吉田 葎

天帝に打ち落とされしひばりかな
初蝶やとり巻かれたる転入生
夏はじめ理科室の罫林立す
戸袋は黄泉へと続く梅雨深し
子の恋の邪魔したくなる花ざくろ

須恵 苑 実 耶

狛銃を肩に主治医が里山へ
冬の日やじゃんけんで得し母の膝
兄の真似したる正座へお年玉
撓ひたる竹が空撃つしづり雪
夜の雪や忍び逢ふごとナース来る

太宰府 山本 則 男

海光を胸に抱きてつばめ来る
初蝶の流寓すでに始まりぬ
ものの芽をつぶし神籤を結びをり
日の丸の皺の増えゆく建国日
明るさの基準菜の花咲きにけり

直方 曾根 富久恵

卓に置く手袋に関節まざと
白梅や村に朝日のゆきわたる
雛壇の高きところはやや暗し
参道に狭き踏切ほととぎす
螢火の明滅に息合はせけり

福岡 永淵 恵子

舟舞台御簾の内より三昧の音
舷に足かけて大見得舟舞台
帯締むる楽屋も見えて舟舞台
細竹をしなはせ祭太鼓打つ
歩板はづし進めり舟舞台

千葉 原 友子

一枚の空と冬田と自由かな
軒しづく木々よりしづく涅槃寺
四阿に水かげろふや鳥の恋
野を焼きて湯屋に集ひし村の衆
啓蟄や薪減りて壁広くなる

北九州 河原 敬子

荒灘や石ごと若布流れ来し
波きらりピアスキらりと磯遊び
窮屈な磯着に慣れず稽古海女
残りもの詰むれば馳走野に遊ぶ
春落葉集まつてゐる外厠

広島 星 加鷹彦

僧掘りし島の釣井や水温む
黄砂来るパンダ祖国へ還りけり
摺師する線の際やか春の宵
日が暮れて桜重たくなりけり
にぎやかに別れてよりの花疲



糸田 宮井知英

出来ぬこと徐々に受け入れ春を待つ
呼び合ふも玻璃の内外恋の猫
猫抱いて八十路の春を楽しめり
目ざはりな白髪抜きをり夕端居
好き嫌ひ際立つてくる暑さかな

福岡 三井所美智子

麦を踏む歌垣山の暮るるまで
子雀の遊ぶ洞あり軍馬の碑
防具背に桜蕊降る下校道
城垣にすがりて草を刈りすすむ
代々の墓は一反ほととぎす

東京 山田正子

一行の今日の日記や髪洗ふ
ラムネ飲む五臓六腑は海色に
牡丹散る白のベールを脱ぐやうに
荷風忌や鼻緒の緩き下駄と傘
川に触れ緑を流す柳かな

長崎 松尾龍之介

横断歩道犬のくしやみと擦れ違ふ
箒目に人となりあり落椿
打ち直し終へしばかりの春の雲
影絵の世界抜け出して柳の芽
石鹼玉追ふ誰もかも夢追ひ人

兵庫 大西乃子

墓石の九十九歳山ざくら
晩年は躑躅に仕へ寺男
泣き声を残し風船青空へ
薔薇生けて憂きこと一つ捨てにけり
オープンカー緑の中へ消えにけり

大野城 森田明成

朝風呂にカルキの匂ひ夏に入る
かたまつて喪服の帰る薄暑かな
存へてどこか間延びの武者人形
回覧は小雨決行溝浚へ
新緑となりて鎮守の改まる

直方 石橋幾代

曼珠沙華蕊より枯れのはじまれり
二階にも声かけてゆく村祭
神輿の縄締め直しまた担ぎゆく
山裾を響かせ蒲団叩きけり
煤払ひ鶏小屋で終りけり

福岡 あさなが捷

思はざる隙間より出る子猫の手
お白洲に引き立てらるる春の夢
四隅みなめくれてゐたる花筵
ネクタイに締められてゐる新社員
七日間山を浮かしぬ山ざくら



福岡 秋津 令

人去れば伸びをしてゐる内裏雛
枝つかみ踏ん張つてゐる雀の子
術なくて怪我の子鳥を手でつつむ
軽鳧の子の遊び尽くせるお濠かな
春深し病みて素直になることも

北九州 坂口 学

若草に座りズボンの尻青し
産卵の鯉の水音柳の芽
引き上ぐる竿三間や若布刈
ふかぶかと挨拶する児金鳳花
流木と隣り合はせに残る鴨

北九州 兒玉 充代

老鶯や朝日は山を表にし
草笛や試合に負けし子が帰る
目札に応ふ目札春日傘
葉桜や水面にのこる風のあと
足音はきつと母と子初夏の宵

直方 吉田 悦子

湯豆腐や筋の通らぬ話聞く
空隠すほどに群れたる寒鴉
華やかなことはなけれど日記買ふ
七種の色を夫と楽しみぬ
紅椿苦しきことは口にせず

兵庫 えとう 樹里

をちこちに露天湯といふ雪間かな
嚙や石碑が石になる途上
生存確認書投函花曇
起こしみる貝母の花の仔細かな
木の芽時ふたをずらして台湾茶

岡垣 田中とし江

雉鳩の和毛ふくらむ初社
願ひごと疾く言ひにけり初詣
社務所出て巫女は少女に大旦
邪鬼を踏む足のゆるびや冬終る
春蟬や仁王はいつも門の番

東京 今井 康子

花びらと共に乗り込む車かな
養花天手術終るを待つコーヒー
ゆりの木の花のカップに光満つ
蜜豆や最後に食ぶる干あんず
涼しさやロイヤルブルーの葉書の字

大阪 田岡 千章

春隣缶ドロップが色に出づ
フアスナーの滑り上々寒の明け
一献と一汁一菜ふきのたう
下萌ゆる紙飛行機はチラシにて
冴返る挺子でも開かぬジャムの蓋

兵庫 林 徹也

帰郷する子の名大きく初暦
手さぐりで止むる目覚まし春浅し
鳥雲に樂の茶碗に父の銘
野遊びの母一畳に収まりて
蝶の昼小指へ亡き母の指輪

北九州 横田 敬子

新米に一合枰の黒光り
木屋や何でも吊す納屋の前
小鳥来る電動式の車椅子
古畳の床も返して年用意
日脚伸ぶ紅茶にミルクつぎ足して

兵庫 岡村 尚子

春深し薬が少しづつ増えて
囀のひとかたまりの中に入る
通院はこの径と決め梅ま白
さくらさくら散りゆく中に鳥の声
仏花とすやや大ぶりの金盞花

神奈川 窪 みち子

春の猫牛乳欲しと擦り寄りぬ
平仮名の巧みなさくら便りかな
春夕焼ビル街柔らかくなりぬ
若葉風肺の奥まで透き通る
シャベルの先身をくねらす糸みみず

兵庫 青木 朋子

大人用独習バイエル春きざす
春寒し朝の鏡に撥ねし髪
料峭や大統領の背に国旗
白梅や大戦殉国慰霊塔
爪切りを嫌がる猫や多喜二の忌

長崎 仲里 奈央

朝露や優しさを身に詰め込みて
リラの花赤毛のアンに励まされ
一筋のピンクが自慢白躑躅
疲れ顔見せぬ花なり花水木
紫陽花を洗面台と厨にも

北海道 押田 裕見子

宝刀と漁夫の口上秋刀魚買ふ
見た目より心根強し秋桜
もう何も背負はぬつもり雁の棹
十三夜父ははのなき爪を切る
花街の名残りもうすれ月明り

兵庫 岩井 京子

海指して鵜の棹翔ける朝の空
野蒜群るどう考へてさう曲る
薔薇園の薔薇より野蒜見て飽かず
飼主を犬がひきずる青葉径
きつかけがほしくて問ふ木花ざくろ

空集

柴田佐知子選

草湿る漠の厚司馬の市

手拍子のこだま馬市終りけり

秋高し売れたる馬へ帽子振り

絵蠟燭持ち炉噺に現れし

北州 深川淑枝

泥割つて瑠璃の目玉の鯉五郎

ペーロンや勝利の權を突き上ぐる

恐竜図鑑開けつ放しや夏休み

素潜りの君を海月と待つてをり

揚がるたびりボンの揺るる花火かな

花水きれいな顔で別れたし

水のごと夜が明け遠野馬の市

馬眠る地の膨らみや葛かつら

東京 中田みなみ

福岡 角野良生

言ひ足らぬままに送りし帰省の子

兵役と言ふがありけり蟻の列

野を焼いてまた光陰を新たにす

焼山の地底さみしき陸封魚

夕鳶の野火に焼けたる兎獲て

絶滅の狼の怨野火猛る

萱の高さ越え走りだす山火かな

反骨の眉根はいまも生身魂

父母すでに先祖の遠さ盆の月

老犬の供は老人九月来る

老衰も老成のうちみみず鳴く

颱風に怯えて少し老いにけり

凍滝のところどころに隙間あり

その辺り片付け北を塞ぎけり

弱りたる躰諾ひ日向ぼこ

一番星見上げ秋耕終りけり

村祭あら炊きの骨太かりき

湯中りのごとく戻れる恋の猫

さくらさくら妖しき袖で誘はるる

直方 石橋幾代

直方 曾根富久恵

角落ちし鹿の小さくなりにけり

目印の島のいくつや鳥帰る

赴任地の山は霞んでゐるばかり

葉桜や戸口がたつく薬師堂

湯気立つる餅工場や寒波来る

一夜経てそつぽ向きたる女雛かな

鼻歌の夫が抜けゆく雛の間

晩年の母の恋の句春の星

手を打つて草叢へ蛇追ひ遣りぬ

太陽へ背を波立てて毛虫這ふ

山ざくら父には一度逢つたきり

豆飯や黙つて座る反抗期

福岡 高倉和子

兵庫 大西乃子